である。テンニング老人とはかつての日本海軍のシーメンス汚職に関係したロンドン駐在海軍大主計竹内十次郎のことである。テンニング老人は明治三七年ロンドンから失跡した後に、カナダのマニトバに住んだといわれるが、年老いて望郷の念やみがたく、田村俊子の愛人、鈴木悦に帰国工作を依頼するが、鈴木の急死と日本の新聞への情報の漏洩にあって帰国を断念し、バンクーバーで狂死するのである。この話は現在江藤淳氏が〝文春〟に書いている「海はよみがえる」や佐々木隆三氏の「波の夕陽の影もなく」にも現れてくるが、この書物のストーリーは長期間にわたるカナダの取材を基礎にしているだけにこれらの日本の高名なライター達の作品よりはるかに迫力がある。私はスーザン・フイリップが数年前に事務所に現れたとき、田村俊子の調査研究をしていると聞いて、そんなことやっていったいどうするの、僕の仕事でも手伝って下さったら、と言った記憶があるが、いまとなって自らの不明を大いに恥じている次第である。なお、本書の英文版が近くUniversity of Toronto Pressから出版されると聞きおよんでいる。

今回の日本カナダ学会のもうひとつの収獲はラムゼイ・クック教授の"Maple Leaf Forever"の日本語版の出版が決ったことである。以前に紹介したことのあるキーリンサイド博士の回顧録も遠からず日本で飜訳出版されることであろう。日本の広い読者層に訴えうる書物が沢山に出れば日本とカナダの二国関係も、それだけソリッドなものになろうというものである。

この夏の**トピックニュース**を少々紹介して擱筆したい。

ペトロカナダ、BPカナダを買収

政府所有の石油会社、ペトロカナダは一〇月三〇日、BPカナダの買収を発表した。BPカナダはイギリス国有のBritish Petroの一〇〇%子会社のBP Canada Holdingが株式の六六・五%、一三七七万三千株を所有しており、今年の六月から親会社の持株の売却を求めていた。買収金額は三億四七五〇万ドル、そしてアセットはオンタリオ、ケベック両州に一六四〇のガソリン・ステーション—シェアは一五%、エッソが二五%、シエル一八%—を所有、リザーブは一九八〇年一二月末で確定埋蔵量が、石油と天然ガス液体一二二五m三、推定埋蔵量が三一二億七六〇〇m三、開発は一九八一年六月末で探査中の三八の井戸から油田四、ガス田五を発見した。開発地域はアルバータ州のデイープペイジン、ピースリバー、ショービン、BC州のマレーリバー、フォートネルソン、東海岸のオフショア、オイルサンドはマルガリト・レイクで、ペトロカナダにとってはPacific Petro, Atlantic Richfield—二社共にアメリカ—Petrofina—ベルギー—に次ぐ四番目の外資企業の買収であり、Petrofinaの買収ですでに二九九〇のガソリンステーションを入手している。（飯田多恵氏より）

なお「カナダ文学案内」のコピーをご希望の方は、ジャパン・インフオメーション・センターにご連絡下さいと。

とめている。カナダで事業経営に当たる人々にとっては大変に参考となる報告であろう。カナダは多民族主義、人種差別排除を唱える理想主義国家のはずだが、実際の運営面では時に意外な非民主的な側面、警察国家的な側面をみせることがある。国武教授が報告したようなカナダの労働法の基本的な性格は、あるいは経営（運営）が行きづまるとすぐ所得政策（インカム・ポリシー）を導入するこの国の政治の体質ともかかわりあいを持つのかもしれない。

政治・経済を離れた分野でも大変によい報告があった。それは大正大学の浅井晃氏で「カナダ文学案内」と桜美林大学の堤稔子氏で「日系カナダ人の文学」がそれである。特に浅井助教授の報告は、〝赤毛のアント・シートンの「動物記」〟、アーサー・ヘイリーの諸作品などからマーガレット・アトウッドに至る約五〇点におよぶカナダ文学を平易な言葉で要約してあり、先生には大変に申訳ない言い方だが、この報告をちょっと読んでおくと、カナダ人との社交の折に、この人はミガク〟があると思われること確実。

私は歴史学も法律も文学もすべて門外漢だからこういう詳しい報告をきいていると、日本の専門的研究者は大したものだと思う。やはりモチはモチ屋である。聞くところによるとこれらの諸研究者のほとんどが、カナダ政府またはカナダ基金などからの授助を受けてカナダを旅行した経歴を持ち、これらの諸報告は、いうならばそのお返しであるとのこと、カナダは先進七カ国のドンジリにあって、いまや経済が疲弊しきったかにみえるが、これだけ日本の学者達に投資をしてカナダという国の広報活動を行っているからには、経済大国日本はカナダで相当な広報、宣伝をやっているに相異ないが、この成果は日本カナダ学会のようにまとまりのあるものになっていないようである。そろそろ逆に"Canadian Association for Japanese Studies"（カナダ日本学会）でも作る時機なのかもしれない。ハーバード大学やスタンフォード大学に日本の学者を作るために派遣するほど金がかからないことは確実なこと。

終りに今回の山形大学における日本カナダ学会で展示されていた「晩香波（バンクーバー）の愛」についてふれておきたい。かつてバンクーバーに一〇数年居住したことがあるという田村俊子の生涯を工藤美代子とスーザン・フイリップという二人の女性がドキュメンタリー風にまとめたこの本は、おそらくこれまで日本で出版されたカナダに関連した書物の中で最も広い読者層にアピールする魅力を持った本であろうと思考される。この本は確実な調査に加えてストーリーの構築がうまく、それに何より読み易い立派な日本語で書かれている。著者達が出版を依頼した日本の出版社は、当初この本の商業的成功を危んで、ウン百万円の保証金の積立を要求したということであったが、幸いにしてこの本は結果的には日本の出版界に受け入れられて、ほとんどの書店で売切れとなり、この種の本としては珍らしく重版が決ってベストセラーになったという。「カナダ」という特殊なテーマでも、良い本であれば商業的に受け入れられる素地が日本でもできつつあることを示した証左といえよう。

この本の中にいくつか興味深いエピソードが出てくるが、その中でできわめてショッキングなのは「テンニング老人」の死を繞る挿話

が実は軽卒千万な思いあがりにすぎないものであることを教えてくれるのが、カナダや日本の学者達との交流である。日本で毎年一回開かれる日本カナダ学会研究大会や総会は、その意味でカナダで生活しながらこの国とさまざまな形でかかわり合いを持つ者にとって大変有効な反面教師の役割を果している。

今年の日本カナダ学会は昨年の札幌に続いて、九月二四・二五の両日山形で開催された。山形大学に熱心なカナダ研究者—飯沢英昭氏—がいるからであろうが、この地方都市で開かれたカナダ学会に一〇〇人近くの日本学者、研究者に加えて、カナダからカナダ史の大家ラムジー・クック教授のほか計四人の学者やカナダ外務省、大使館関係者も加わって、コンパクトな会合ながら大変に盛会で熱心な討議がきかれた。出席者も東大・東京女子大・東京外語大など関連の諸大学のみならず、同志社大、関西学院大・京大などの関西諸大学、そのほかの大学、更にＮＨＫ・東京経済新報なども加わって、日本におけるカナダ研究の裾野がかなり広がってきていることをうかがわせる。

今年の大会では「北米社会におけるカナダ」が主たるテーマとなったが、このテーマの下での諸報告、あるいは自由論題分野の諸報告でも大変に興味深い報告や研究発表があった。二、三例を与げてみよう。

秋田大学の木村和男氏は「一九三〇年代の歴史的な認識…カナダ・ナショナリズムとアメリカ帝国」というテーマで報告を行なった。現代のカナダの政治と経済に興味のあるわれわれは、なぜ三〇年代の米加関係かと思いがちだが、報告を聞いていると三〇年代のカナダの今日の政治状勢とのかかわり合いが理解されてくる。われわれはアメリカの三〇年代…ニューディールとルーズベルト…の米国政治経済史における重要性はよく知っているくせに、カナダの三〇年代はほとんど知らないでいる。

木村教授はこの報告をクラシックなカナダ史観に挑戦したカナダのニュー・レフトの歴史家ネイラーの史観の紹介という形で行ない、一九三〇年代はカナダの商業資本のアメリカ産業資本への屈服の時代であると総括する。歴史家としてのネイラーにはいろいろと批判もあるらしいが、この報告に特に興味を覚えたのは、ネイラーがＮＤＰ左派、特にかつてのワッフル・グループと深いかかわり合いを持っていたことである。ワッフル・グループは結果的にはＮＤＰの主流から排除されたものの、同グループをめぐる論争が七〇年代カナダのナショナリズム高揚のひとつのきっかけとなったこと、更には今日までカナダ連邦政治の主流をしめてきた自由党左派が陰に陽にＮＤＰへの妥協を示しながら政治運営をやっていることなどはわれわれも知っている。しかしその背後にネイラーのような学者がいたとは知らなかった……。

木村教授の報告のほか、新潟大学の国武輝久氏の「カナダ労働法制の現状と課題」も大変興味深かった。カナダでの投資活動を考える日本の経済人にとって第一の関心事はカナダの労使関係と労働事情であるが、国武教授の報告は「労使間の争議、解決力に対する基本的な不信感」をペースにしたこの国の労働法の諸問題を立派にま

リフォルニア大学・ワシントン大学など、美しい建物を見ている私にとってはいささか物足りないが、マニトバ大学は古い建物と新しいものとが同居していて見ていて楽しいが、両大学の共通したところは、音楽学部の建物が平凡でつまらなく感ぜられたことで、音楽はトロント大学の方が有名で日本からの留学生も多いとのことであった。ブリティシュコロンビア大学・マニトバ大学共、日本語科があるが、会話が少なく漢字の説明とか、源氏物語・枕草子などの読解に終始して、実用的でないことから中途退学も多いということであった。

ブリティシュコロンビアの首都ビクトリアは、バンクーバーから六七キロメートルでフェリーで渡ると、そこにはロンドン蠟人形館があり、昔の王、女王はじめプリンス・チャールズ、エルビス・プレスリーまで揃っており、本物そっくりで今にも話しかけそうな気がしたと、マニトバ・オンタリオ・ケベック各州会議事堂を訪れて、王や女王の油絵を見たときH・Y先生が話しておられたことが忘れられない。

建物や道路の名前をみても各国の国籍入りで面白い。バンクーバーは圧倒的にイギリス系のマッケンジーとかマクドナルドというのが多く、トロントはキング・クィーンと王室ご用達?、王室が百貨店に投資なさっているとか。ウイニペグはセントメアリにセントジェームスとバイブルを読んでいるような感じで、またセント・ポールやセント・ピーターにまじってセント・ピタル（ショッピングセンター）などというふざけた答えが出てくる程にセントとつくところが多かった。またモントリオールでは、古いカトリック・ギリシャ語の東方のオーソドックス・ドイツ語のルーテル・メーナイトなどと各種取り揃えて?教会が信者のやってくるのを待っているということであった。

ビクトリアのブッチャートガーデンの一〇カ国語のパンフレットが出ていると指さされてニヤニヤ、勿論、日・英・独以外全く読めないが、そっと仏を手にとって見てニヤニヤ、なるほどカナダはモザイク（よせぎ・きりはめ細工）文化の国だなあと感心する。例年よりは旅行者の数が少ないとS・Kさんが嘆いていたが、バンクーバー、バンフあたりは日本人旅行者が数多くいて懐しかった。今はカナダロッキーなどが旅行として流行しているとのこと、中央部のマニトバは東・西どちらからしても、最も典型的なモザイク文化をみせているように思ったが僻目か。

多大のご協力ご援助を頂いた、田村タイさん、窪川哲さん、飯田多恵さんに感謝申しあげ擱筆する。

参考文献

日加ジャーナル・日本カナダ学会、一九八二年一一月一日より。

日本カナダ学会と「晩香波の愛」

岩崎　力（T. Iwasaki & Associates 代表）

カナダで一〇数年生活し、この国の政治・経済、あるいは文化の諸面にふれていると、大体カナダという国の仕組みでその背景はわかったような気持ちになってくる。ところがこの「もうわかった」

ウイニペグとトロントで出席した。会場はどちらも最も古いホテルの一つで、屋根が銅のドームで有名である。ウイニペグの昼食会では、一番の遠隔地から出席したということで、昔、レッド河の植民が使った牛車のミニチュアをプレゼントされ、トロントでは八月中旬IMFの総会があり、その後、日加経済人会議と続いたので、銀行家・金融人など日本人名をあげて、知っているかと聞かれたり、来年の大会に参加するかなど質問ぜめで、ロータリー記念品をいろいろと頂いた。

トロントでは、ナイヤガラの滝とか農場主宅など、それにオタワ・モントリオール・ニューヨーク見物にも出掛ることができたし、H・Y先生は一生の思出となる大収穫を得られることとなり、お骨折りの資料収集の整理をどうなさっておられることかと、ふと脳裏を掠める。ここでは日系のS・KさんやT・Iさん、それに学生のY・Mさんに大変お世話を御掛けしました。あの広大なトロント大学は、カナダ開拓時代の毛皮商人によってその設立をみたが、ほどへて寄進により公立となったとのこと。

バンクーバーではわれわれのホテルへ、T・Tさんを送って来て下さったことと、在日時代に愚息もお目に掛ったことがあるとのご縁で、一緒に海品料理をたべに行ったD・Dさんご夫妻。イギリス系であるが、以前に、日本で技術顧問をしていて、日本語を覚えたので使いたくて仕方ない。奥さんはスコットランド生れで、英語になまりがあり、われわれの、日本語的ななまりの英語と日本語が面白いとみえて、たまたま、うしろのテーブルに座ったアメリカ人の旅行者らしい若者三人が料理そっちのけで、われわれの方を注目、そのうちに回りの人達皆んなが気づいて、下の海浜での海洋祭りのハワイアンショーより、われわれの方に注目が集まったようであった。

バンクーバー、ウイニペグ、トロントはイギリス系だが、モントリオールは完全にフランス系、アルバータ、サスカチワンはウクライナ系という。フランス・イギリス以外の住民が多く、同じ国でも……という表現が自然に出る。ウイニペグで教会の本部はLCAというルーテルの教会を訪れたが、このLCAだけで一〇も数えられるし、その他の二つを合わせると三〇ものルーテル教会があるとのことで、ドイツ人や北欧系の強いことを示すし、トロントではイタリヤ系住宅街も残っていた、バンクーバーは聖公会(イギリス正教)が多いということであった。

四年前のことだがイギリス文化のカナダ版ということでブリティシュコロンビア大学、シェトクスピアの生家の完全に復元された家、バンクーバー効外のカナダ版〝明治村〟などを訪れたことを思出していた。

このブリティシュコロンビア大学で最も有名なのは、日本の新渡部稲造を記念して日本庭園を作り一般に公開している。なお大学では、旅行者のためにキャンバス内のツアーを設けて学会参加者にはむろん、一般旅行者にも寮の一部を提供して、夏のバカンスを安く楽しませている。

ここの建物は機能的、実用的で、ここ数年来、アメリカ西部のカ

d　繊維の使用法。保存および使用についての研究の詳細な提案を登録の為に提出すること。履修資格、衣料および繊維専攻の四年次生で、学科長の許可が必要。

おわりに

学部の紹介を試みたので、カナダの教育制度を支えている精神風土の特徴の一端でも追求してみたい。

まず、CPの機中で隣席であったブリティッシュ・コロンビア大学へ留学している日本人留学生が言うには、この夏の夏季大学はトロント大学で、語学(仏語と伊語)と音学を選択することにしたと、また加えて単位取得はそれほどむつかしいものではないということであった。T・Tさんが言うには、昨年の夏には四十二日間の郵便ストがあった。日本ならもう三日目には管理職やら非組合員を動員して何とか集配を行なうが、カナダはのんびりしたものでスト期間中全く配達なしであったということである。

ウイニペクにあるマニトバ州立大学は、大学が一寸した町並みで、大学本部・女子寮・男子寮・宿泊施設などと、それに日本の生協にあたるセンターは独立した建物で、一階や地階に、食堂・売店・郵便局・銀行・理容美容院・旅行社まで出揃っていた。マニトバ州はカナダの中央部に位置し、ウイニペグはその首都にあたる。

ウイニペグはインデイアン語で「出る水」という意味だが、成程、川や湖の水は濁って穢ない。地図をみると丁度米国ミネソタ、北ダコタ州の北に当り、緯度でいえば北緯五〇度より北で、ソ連領・樺太(サハリン)のアレクサンドロフスク・サハリンスキーに当る。西部のバンクーバー、東部のモントリオール、トロント、に比べれば、はるかに小さい都市だが、博物館、各宗派の教会が町中に散在し、結構に旅行者を楽しませている。たまたま美術館では「アメリカの生活の中の銀器」の特殊展示があって、われわれの関心を誘った。

しかし国内の不況は深刻でバンクーバーでは一〇%以上、マニトバでも七・八%の失業率を示していた。ウイニペグでは競馬場がシーズン中に閉鎖、この春には三つの教会が相次いで売りに出され、経済学の先生方がおどろいておられた。

一九八二年は冬が長く、一時は零下八五度という日もあったという、幸いわれわれが到着した七月は夏らしい好天に恵まれ、八月に入ってトロント・モントリオールで多少の小雨にあった程度で内心ほっとした。

われわれは各店の値段の比較・文化の違い・各州の州報・政府白書などを比較する為に、西、中央、北、東部の各地、バンクーバー・アルバータ・ウイニペグ・カルガリー・エドモントン・バンフ・モントリオール・トロントなどを訪れ、大学・博物館・州政府機関などを訪問した。日本と違って州によって税金が違い、同じ品物でも値段がまちまちで長く住んでいても支払いの時まごつくという。コカコーラ一缶がウイニペグでは六〇セント、バンクーバーでは九〇セントは忘れられない。

ロータリーの会員なのでメークアップとバーナー交換の昼食会に

繊維色素と仕上がりの性質にかかわる評価の物理的と化学的な方法について。履修資格二・一二三か二・一二〇。

六四・三四〇　繊維および衣装（身なり）着物・装身具産業の経済（三―〇）三

繊維関係の衣装（身なり）着物・装身具産業の経渡分析―発展とその構造の技術と使い方について。学生は三〇四と以前の三四二の両方を取得することはできない。履修資格二二二と一八・一二〇。

六四・三四一　繊維政策（三―〇）三

カナダの衣料製品と繊維市場の種類、価格、品質に影響する要因となる政府の政策を批判的に調査する。一九八二～八三年度は未開設。履修資格一〇二と二二二か講師の許可が必要。

六四・四一五　衣料と繊維の四年次生の論文（三）

承認を受けた論題の調査に基づいた短い論文の準備とその提示。履修資格三二七。

六四・四一九　衣料と繊維の講読（四―〇）三

衣料と繊維の分野の最近の発展の顚末。履修資格二一五と二一七。

六四・四二一　衣料と繊維のゼミナール（二―〇：二―〇）三

衣料と繊維の分野にかかわる文献とほかの情報源については批判的な研究。口頭と文書によるレポートが必要となる。（この学科の専攻学生に限る）

六四・四二六　繊維と衣装（身なり）着物・装身具の市場（三―〇）三

繊維産業市場への適用。履修資格二二二と二七・二二一か講師の許可が必要。

六四・四二九　衣装（身なり）着物・装身具の製造（二―四）三

衣装（身なり）着物・装身具産業でのデザインと生産。履修資格、講師の許可が必要。

六四・四三〇　繊維の調査（一―四）三

繊維の化学的、物理的、顕微鏡的性質の量的で且つ質的な分析、繊維、糸、生地の調査に使われるものを選択した研究（調査）技術の研究。履修資格三三九か講師の許可が必要。

六四・四三一　衣類と繊維の実践・三

学外で適当な条件のもとで指導を受けた衣料と繊維の実践的な経験をする。履修資格、衣料および繊維専攻の四年次で、学科長の許可が必要。

六四・四三二　繊維と衣料の論題選択・一・三

ある一つの衣料または繊維の特殊な分野を固定的に（指導教員と一対一で定めたものを）指導を受けながら学習する。履修資格、講師の許可が必要。

六四・四三三　繊維と衣料の論題選択・二・三

内容・資格、前項四三二と同じ。

六四・四三四　四年次生の計画（目標）・三

あらかじめ承認を得た論題の独立した研究で、

a　衣装（身なり）のデザインの市場または生産（産業界）。

b　衣装と繊維の歴史。

c　衣料の社会心理学的な状態。または

社会的、政治的な要因が市場に影響を与えるのはなぜか。

六四・三二二　衣類の社会心理学的な状態condition(常態normal state)論（三―〇）三

個人と社会的なグループの衣類にかかわる行為（行動）。履修資格一七・一二〇か七七・一二〇。

六四・三二三　衣装（内装用品具）のデザイン：カーテン類（〇―六）三

カーテン類の内装用具品での繊維の様相とその組合せ（構成）。履修資格二一五。

六四・三二六　繊維製品と消費の概念（三―〇）三

繊維製品の可能性と使用を決定する消費者、政府、卸商、生産者の批判的な調査。履修資格一八・一二〇と二一七、同時履修二一七。

六四・三二七　衣類および繊維の研究（調査）の過程（方法）（三）

調査(研究)活動と資料収集の方法、および衣類、繊維の研究（調査)に使用される分析の種類の研究。履修資格、講師の許可が必要。

六四・三二九　西洋におけるドレスの進化（三―〇）三

古代から二〇世紀までのファッショナブルなドレスの歴史的意義について。

六四・三三一　応用繊維のデザイン（二―L）三

糸と色彩・色の応用デザインを考慮した(通しての)、繊維と衣装（身なり）の審美的な訴えを高度に、豊かにする方法について。履修資格一〇二と二一五またの講師の許可が必要。

六四・三三二　繊維の歴史（三―〇）三

繊維の繊維質、生地、仕立あがりの発展と変化について、有史以前から今日に至るまでを探ぐる。

六四・三三三　比較衣類構造学（〇―六）三

衣類の構造と適合の選択的な方法の応用と評価について。履修資格二一五

六四・三三四　カナダのドレスの歴史（三―〇）三

カナダで発達したドレスの形態の歴史とその意義について。

六四・三三五　世界の民族衣装（三―〇）三

文化的な衣装の特別な形とそれらの発展に影響をもたらした要因を学習する。

六四・三三六　衣装（身なり）・装身具のデザイン：仕立上り（〇―六）三

スーツおらびコートの型紙作りの技術と、特製品・高級デザインおよびこの理論。履修資格二一五と二一九

六四・三三七　繊維評価の方法（三―三）三

感覚と物理的なテストの方法。使い方および品質の評価、繊維の品質規制の原理と衣装（身なり）装身具を配慮した製品。履修資格二二〇と五・二二〇または五・二二一および講師の許可が必要。

六四・三三八　衣装（身なり）のデザイン：型紙作り（〇―六）三

立体体形に合うようにパターンを作る理論。作製および技術の段階評価、コンピューター技術の本質について。履修資格二一九。

六四・三三九　繊維と色彩の化学（三―三）三

繊維を形成する重合体、染色剤および仕上げの化学。洗濯された

許可が必要。

六二・四四六　家族の財政面でのカウンセリング（三―二）三

負債を負った家族へのカウンセリングの理論と現実（実践）。負債の分析、ほかの方法による解決策と家族の福祉に関する法律的、社会心理的要因および財政上の能力の研究。一九八二～八三年度および隔年に開設される。履修資格三四五か講師の許可が必要。

六二・四七三　家庭とその居住（同居）によるこの政策の要因（三―〇）三

カナダでの家族との住居地域の市場における社会的、経済的、政策の中心となるもの。一九八二年～八三年度および隔年に開設される。履修資格三七五か講師の許可が必要。

被服学および繊維学（六四）

六四・一〇一　基礎のデザイン（二―L）三

創造の原理：デザインとサイズ：基準と品質の中心点：製造産業。

六四・一〇二　現代繊維学（三―二）三

ファッション産業と家庭や病院で使用する繊維の性質とその実用性を決定する要因について、生産者、小売店、消費者および生産物選択の範囲。学生は一〇二と以前の二一七の両方を取得することはできない。

六四・二一五　ファッション性デザイン：造り方（一―五）三

装具（装身具）の造り方とその用途の技術と理論。構図（型）の発展と応用。履修資格二一九か講師の許可が必要。

六四・二一七　繊維学（三―L：三―L）六

繊維品（生地）仕上げの構造と材質、需用家（使用者）として利用に関する環境的な条件。履修資格一一一と二・一二三か一二〇。

六四・二一八　ファッションデザインとイラストレーション（〇―六）三

ファッション（流行・モードの型）、イラストレーション（さし絵・図解・説明図）の技術、個人の衣類のデザインの創造、個人ドレスの理論。履修資格一一一と六二・一七〇か講師の許可が必要。

六四・二一九　衣装（身なり）のデザインのパターンの発展（二―四）三

衣装・身なり（着物と装身具）の為の様式（型）の発展に用いられる方法の理論とその応用。学生は二一九とこの前の二一四の両方を取得することはできない。履修資格一〇一。

六四・二二〇　生地の使用方法（三―三）三

糸編か糸編でない生地（織物）の物理的、審美的、生理的な性質、構造的な特質に加えて、選らばれた利用方法の中心点とその使用法の測定基準。学生は二二〇とこの前の二一七の両方を取得することはできない。履修資格一〇二。

六四・二二一　繊維管理学（三―三）三

使用と更生にかかわる繊維製品の管理。放射性物質と空気汚染を含む有害環境の影響、および繊維の寿命に関するさまざまな洗濯の方法。履修資格一〇二。

六四・二二二　ファッション産業の動向（三―〇）三

生産、販売および繊維製品の使用に関連した産業の構造と経済的、

る。履修資格二一一か講師の許可が必要。

六二・四二三　家族の動向と人間の発展・二（三―〇）三

家族の行動の原理に基づいて家族を援助するために使用される技術の特殊な考慮をはらい考究するもので四二二の延長。一九八一―八二年度および隔年に開設される。履修資格四二二か講師の許可が必要。

六二・四二六　人間発展の理論・一（三―〇）三

人間の発展にかかわる史的追求と、現代の主要な理論の問題の復習。履修資格二〇九か講師の許可が必要。

六二・四二七　人間発展の理論・二（三―〇）三

人間の発展にかかわる理論の高度な研究で、いろいろな条件でのこれら（四二六を含む・訳者註）適用に重点をおく。履修資格四二六か講師の許可が必要。

六二・四二八　家族研究の実践・一（二―二：二―二）三

学生は特に関心があるグループと一緒に働くチャンスがある（たとえば就学以前の幼児、思春期、両親、ファミリーグループ、老齢者）。履修資格、講師の許可が必要。

六二・四二九　家庭研究の実践・二（二―L：二―L）三

四二八とおなじ。

六二・四三一　家族研究における調査の方法・一（三―〇）三

環境内での個人と家族関係の研究に用いられる研究（調査）の方法の基礎。履修資格二〇九と五・二二〇か五・二二一または講師の許可が必要。

六二・四三二　家族研究における調査の方法・二（三―〇）三

四三一の不足を補う論題（議論）のもっと高度な学習。学生は本人が興味を持つ分野の個人的な研究（調査）と計画（課題）を実行すること。履修資格四三一か講師の許可が必要。

六二・四四一　家庭管理の高度な学習（三―L）三

家庭管理の理論の高度な学習：実践的な経験をするチャンスがある。一九八二～八三年度および隔年に開設される。履修資格、二四三

六二・四四二　世帯活動（生活）の分析（四―〇）三

生活周期を通しての家庭管理に関係がある働く人、仕事、労働の場の研究。一九八二～八三年度および隔年に開設される。履修資格三四六か講師の許可が必要。

六二・四四三　家族の経済に関する特殊な論題（議論）（四―〇）三

学生が特に関心を持つ家庭経済の分野での批判的な研究をするチャンスと考えよう。履修資格、講師の許可が必要。

六二・四四四　家庭管理での特殊な論題（議論）（四―〇）三

学生が特に関心を持つ家庭管理の分野での批判的な研究をするチャンスと考えよう。履修資格、講師の許可が必要。

六二・四四五　家庭経済での資源および機能（三―二）三

カナダの経済と関連する家庭経済の条件に関する原理、主な問題および傾向について、実践的な経験のチャンスが与えられる。一九八一～八二年度および隔年に開設される。履修資格四四一か講師の

妊娠から老齢に至るまでの成長と老化の生理学、心理学、社会学的な要因の総合研究で相互規制的な見解が強調される。一九八一～八二年度および隔年に開設される。履修資格二〇九か講師の許可が必要。

六二・三二〇　人体の発展にかかわる問題点の調査・二（三―〇）三

三一九の不足を補う論題の高度な議論。一九八一～八二年度および隔年に開設される。履修資格二〇九または講師の許可が必要。

六二・三二一　父兄家族以後（三―〇）三

家庭から子供が離れていって残された家族に必要な調整の調査（研究）、これに含まれる論題は何か？、家（住宅）、健康、栄養、衣料に関する要因、老人（祖父母）の合理的な生活とはどうすればよいのか。履修資格二〇九、二一一または講師の許可が必要。

六二・三四五　消費者問題とその影響（三―〇）三

消費者としての個人と世帯に影響する要因の研究、消費者としての行動の原理、消費者教育、現代の消費者の問題点。履修資格二四三または講師の許可が必要。

六二・三四六　家庭の資源管理と環境（三―L）三

資源の家庭での使用と管理の理論に対する適用に、エネルギー、水、家庭用設備を含む。現代の消費と保存（保管）の問題点。一九八一～八二年度および隔年に開設される。

六二・三七三　色彩の理論と応用（二―三）三

色彩と色の混合にかかわる理論の研究。物理的で社会環境に適用される、デザインの創造的な中間体としての色の分析（一九八一～八二年度および隔年に開設される）。履修資格一七〇と講師の許可が必要。

六二・三七四　家庭とその環境の計画（二―三）三

家庭の性格を用いた応用問題と、近い環境との計画的なデザインの分野。（一九八一～八二年度および隔年に開設される）。

六二・三七五　同居家族全体の消費者としての選択（三―〇）三

家庭と市場とのかかわりあいにおける消費者としての家族構造と、手段としての家庭の選択範囲。法律的、財政的、配慮および家庭と共同社会。学生は三七五と以前の四二七を取得することはできない。履修資格二七二か講師の許可が必要。

六二・四〇七　家庭（生活）の研究ゼミナール（四―〇）三

人間の発展と家庭経済および管理、または住居とそのデザインの分野にかかわる研究（調査）の考究と批判。

六二・四一二　人間とその家庭（生活）の進歩にかかわる特殊な論題（議論）・一（三）

学生にとって特に興味のある人間の行動の分野に対する批判と研究を実行する機会として。履修資格、講師の許可が必要。

六二・四一三　人間と家族発展の特殊な論題（議論）・二（三）

四一二参照のこと。

六二・四二二　家族の動向と人間の発展・一（三―〇）三

家族の行動の原理に特に重点をおいた人間発展の家庭とこれに対する社会要因の影響。一九八二―八三年度および隔年に開設され

これらのコースは、他学部の学生のために設けられている。

三〇・三二二　人体栄養学での農産物（三―〇）三

人体栄養学に重点をおいた栄養素とその代謝の研究（調査）。履修資格と同時履修、二・二二〇または二・二三五。

三〇・三二三　良好（清康）な健康保持のための栄養学（三〇―〇）三

各個人の健康の為の栄養の役割と栄養素からみた最近の問題点の科学的な根拠。履修資格、特になし。

家庭の研究（六二）

六二・一〇一　家庭での人間の発展（三―〇）三

寿命の関係にかかわる家庭内での人間発展過程の主要因に関する初歩的な調査。学生は一〇一と以前の一一三の両方を取得することはできない。

六二・一四二　家庭維持（管理）の理論（三―〇）三

評価を含んだ家族計画、資源の割当（配分）、決意（意志決定）、目標の設定とその維持（管理）上の理論。家庭外の決定的な効果と環境との関係。学生は一四二とこの前の一四一の両方を取得することはできない。

六二・一七〇　デザインの基礎（三―〇）三

デザインの要素とその理論。学生は一七〇と以前の二七〇の両方を取得することはできない。

六二・二〇九　人間発展の理論・一（三―〇）三

人間発展の過程における関連要因の総合研究。履修資格一〇一または講師の許可が必要。

六二・二一〇　人間発展の理論・二（三―一）三

二〇九の不足を補う高度な議論。一九八二―八三年度および隔年に開設される。履修資格二〇九または講師の許可が必要。

六二・二一一　家庭の研究：家族関係（三―〇）三

人間の発展に関係があるような家庭生活の周期に関与する模範的な家族担当、対人関係（型）。家族および人間の発展に影響をおよぼすものと思考される内外の環境問題調査。

学生は二一一と以前の二〇八の両方を取得することはできない。

六二・二四三　家庭の資源・財政管理（三―〇）三

家庭の財政管理に重点をおいた家庭資源の消費管理の理論。履修資格一四二と一八・一二〇か許可を得ること。

六二・二七一　デザインの創造（一―六）三

デザインの構造と応用の分野であって、学生に創造能力の発展と調査が期待されている。（一九八二～八三年度および隔年に開設される）履修資格一七〇または講師の許可が必要。

六二・二七二　生活の為の環境（三―〇）三

生活周期でのいろいろな段階とその家庭の需要と価値・および目標に関連した家庭の所在地、住所地域の文化とその歴史的な尺度（基準・変遷）。学生は二七二と以前の四七二の両方を取得することはできない。

六二・三一九　人体の発展にかかわる問題点の調査・一（三―二）三

二・一二三または担当講師の許可が必要。

三〇・四一一　応用栄養学（2—L）三

栄養のプログラムにかかわる計画とその実施と評価への導入。カナダおよび世界各国への応用。履修資格三〇四または三一七。

三〇・四一二　卒業学士論文三

文献の調査研究または実験・調査のレポート準備と、その提出について。

三〇・四一三　応用感覚方法（三—L）三

食品の各感覚に訴える原理、パネル選択の訓練および評価の方法。履修資格、担当講師の許可が必要。

三〇・四一四　食品の量産および管理（½—L—½—L）三

メニュー計画、食品コスト、医療関係機関での食品生産とサービスの一般的な方法の実験。履修資格三一八および二一一または三二一あるいは担当講師の許可が必要。

三〇・四一五　食品実験（二—L）三

食品の化学および物理的性格の研究での実験技術の紹介。各個人それぞれの食品問題とその調査を含む。履修資格二一一か三二一または担当講師の許可が必要。

三〇・四一六　食品学・栄養学のゼミナール（二—〇：二—〇）三

食品学・栄養学分野の研究（調査）の批判を研究するもので、口頭および文書でのレポートが必要。履修資格三一七と二三二一のC点。

三〇・四一七　グループの食品サービス（二—L）三

食品規制を専攻する学生は履修できない。団体および小グループの食品サービスの管理（学校給食・養護施設・社会的グループなど）。履修資格二一一か三二一および担当講師の許可が必要。

三〇・四二二　食品サービス設備のレイアウトおよび備品（2—L）三

食品サービス設備に対して計画的に理論を応用する。備品の選択と管理以前の四一八とは共に履修できない。履修資格、担当講師の許可が必要。

三〇・四二三　治療的な栄養学（三—一）三

慢性で普通に社会で治療がおこなわれている病気の状態での食事規制の修正、たとえば糖尿病など。履修資格三一七か三二五または講師の許可が必要。

三〇・四二四　治療的な食事規制の適用（三—一）三

病院で普通に治療される急性疾患に対する食事規制修止ノ原理、手術の状態、肝臓疾患、胃腸疾患など。履修資格三一七か三二五または担当講師の許可が必要。

三〇・四二五　食品選択のトピック（議論）（三—〇）三

食品学の研究（調査）での最近の進歩とその基本、および応用の双方。履修資格、講師の許可が必要。

三〇・四二六　人体栄養学のトピック（論題）選択

人体栄養学の研究（調査）での最近の進歩。履修資格、講師の許可が必要。

サービス・コース

三〇・二一二　食品学および栄養学の理論（三―〇）三
健康とその栄養状態に関する食物の消費体系。食品立法および栄養理論に関する研究。これを履修する学生は、二一二とこの前の三一九の両方の単位は取得できない。履修資格は一一七、一一九および二八・二〇五または、担当講師の許可が必要である。

三〇・三〇三　食品の研究（調査）講読（三―〇）三
食品と食品の研究（調査）にかかわる最近の発展について。口頭および文書によるリポートを提出すること。履修資格は担当講師の許可が必要。

三〇・三〇四　家庭の栄養学（三―〇）三
生活サイクルを通じた栄養学的な要求。望ましい食品習慣の形成。履修資格、一一七と二・一二三が必要。

三〇・三一七　栄養学の基礎（三―L：三―L）六
栄養とその働きの集中について学習し、人間の食事制限に必要な要因に重点をおく。これを履修する学生は三二五と三七七の単位は取得することができない。履修資格一一七または同時履修二・二三五および二二・二二五が必要。

三〇・三一八　食品の価格と規制の制度（三―〇）三
基本的な計理理論（会計論）と経済的な状況（状態）の解釈（解説）。コスト規制の技術と購入に関する理論であり人事を含む保管・生産・メニュー計画。

三〇・三一九　社会的で技術的な変化を伴なった栄養価値（四―〇）
消費市場での今日的な変化。一つのある食品の栄養的な意味あいとその強化（強化米などのほか）。添加物、レッテル（商標）に関する規則の哲学。履修資格二一一と三〇四または三二一と三一七が必要。

三〇・三二一　高級食品の研究（三―L：三―L）六
主要食品のプロセス。保存・構造・機能についての化学的な保存方法の調査。学生は三二六と三二一の両方の単位を取得することはできない。履修資格三〇・一一九あるいは同時専攻として二・二三五と六〇・二二〇または七八・四一五が必要。

三〇・三二四　食品工場におけるミックスパケジを考えた造り方、つまり保存方法を化学的な形態としてとらえる。

三〇・三二五　上級人体栄養学（三―〇）三
栄養素とその代謝の総合研究で、人間の食事規制にかかわる必須項目に重点をおく。学生は三二五と三一七の単位を取得することはできない。履修資格一一七または同時履修は二・二三五および二二・二二五と担当講師の許可が必要。

三〇・三二六　食品の品質評価（三―L）三
食品の品質を決定する感覚の化学および物理的技法についての全体的な学習。学生は三二六と三二一の単位を取得することはできない。履修資格二一一および三二四と五・二二〇または五・二一一あるいは担当講師の許可が必要。

三〇・三二七　加工食品の栄養価値（三―〇）三
食品の栄養価値についての取扱い、商業的な加工、食品サービス、家庭での準備の効果に関する学習。履修資格一一七、一一九および

c　学部外の選択一二単位。

学部外からの選択単位は、一つの科目から最低一二単位選らばなければならない。

三　一九八一年以前に登録した学生については学科目が継続している。くわしいことは部長室で配布される。

コース概要

一般部門

二八・一〇一。近い環境での人間の要求（三―〇）。近い環境での基本的な要素の調査（衣・食・住）。この家庭生活で基本となるものと、家庭におよぼす影響のなかで、消費体系と決定のプロセスにかかわる研究の組織的なアプローチ。

二八・二〇四　コミュニケーション（情報）の理論と技術（二―L）三

口頭および非口頭での伝達の理論と実際には二〇四と以前の二〇一の両方の単位を取得することはできない。

二八・二〇五　研究（調査）の基礎（三―〇）三

自然と社会科学の研究（調査）技術の理論であって、学部内のいろいろなクラスに応用される。

二八・三〇九　人間の環境における問題点（三）

仕事場における共通の関心と、問題の解決となる対策へと導き、調査・発展についての学習をするが、履修資格はこの学部で一年以上在籍した者に限る。

二八・四〇四　コミュニケーション（情報）の理論と技術（二―L）三

コミュニケーション技術の高級なものなのでマスコミに中心がおかれる。履修資格は担当教師の許可が必要である。

二八・四〇五　人間環境のゼミナール（二―〇・二―〇）三

人間環境学にかかわる数種の文献批判の学習をするが、口頭ならびに文書によりリポートが課せられる。

二八・四〇六　人間環境学の特殊な研究（三）

独立した学習内容で、特殊な分野についての指導で研究（調査）を含むこともある。受講許可がおりる前に学生は、詳細な学習内容の計画を提出しなければならない。履修資格はカウンセラーの許可が必要である。

食品学および栄養学（三〇）

三〇・一一七　基礎栄養学（三―〇）三A

適切な食事制限に対する基本的な栄養素の研究

三〇・一一九　基礎食品学（三―一）三

構造と機能的な分野に加えて市場形態に関する食品の選択とその取扱かいについてであるが、一一九と前の一一八または七八・二〇一の一つに限られる。

三〇・二一一　食品の研究と管理（三―L）三

食品構造と食品要素の機能および準備の技術。家庭およびビジネスの理論。食物品質のいろいろな評価。食品管理。これを履修する学生は、二一一と以前の二一〇の両方の単位をとることはできない。

履修資格は一一九および二・一二三が必要。

為)、繊維経済および市場(経済行為)、繊維の歴史、繊維の科学に重点をおくもので、繊維科学に重点をおく学生は、この分野の研究のバックグラウンドとして高校時代に化学三〇〇を履修しておくことが望ましい。

コース番号		単位数
第一年次		
一七・一二〇	心理学の基礎	六
一八・一二〇	経済学の理論	六
二八・一〇一	近い環境での人間の要求	三
六二・一〇一	家族たちの人間発展	三
六二・一七〇	デザインの基礎	三
六四・一〇一	基礎デザイン学	三
六四・一〇二	現代繊維学	三
六四・二二二	ファッション産業の動向	三
第二・三・四年次		
第二年次の始まる前に、履修科目全体についてカウンセラーのアドバイスを受けなければならない。		
二八・二〇五	研究(調査)の基礎	三
二八・二〇四	コミュニケーション(情報)の理論と技術	三
二八・三〇九	人間環境学の問題点	三
六四・二二〇	布地の使用法	(三)
または		
六四・二二一	繊維の管理	(三)
六四・三二二	衣類の社会心理学	三
六四・四二一	衣類と繊維のゼミナール	三
	選択の化学	六
または		
コンピューター科学(註一参照のこと)		
選択科目六六(註二参照のこと)		
選択科目の註二		

一　学生で繊維科学に重点をおく者は、化学二一二〇または二一二三を選択すること。

二　選択科目は、最低単位数として次のものを含むこと。

a　衣類と繊維のうちから二四単位。

これらの単位は、次の四分野のなかから少なくとも二つを選び、そのうち少なくとも一つは四〇〇のレベルコースを含まなければならない。

i　建築デザイン学・コース、二一五、二一八、二一九、三二三、三三三、三三六、三三八および四二九

ii　繊維学および市場機構と経済学・コース、三四〇、三四一および四二六

iii　繊維学説史・コース、三二九、三三二、三三四および三二五

iv　繊維科学・コース、三三七、三三九および四三〇

b　学科外と学部内での選択六単位。

または

七七・一二〇　基礎社会学　（六）

一八・一二〇　理論経済学　六

二二・一二三　人間の身体構造と生理学　三

二八・一〇一　近い環境での人間の要求　三

六二・一〇一　家族という人間の発展　三

六二・一四二　家族（家庭）経営の原理　三

六二・一七〇　デザインの基礎　三

第二・三・四年次

第二年次の始まる前に、履修科目全体についてカウンセラーのアドバイスを受けなければならない。

五・二二〇　統計分析　三

二八・二〇四　コミュニケーション（情報）の理論と技術　三

二八・二〇五　研究（調査）の基礎　三

二八・三〇九　人間環境学の問題点　三

三〇・一一七　栄養学の基礎　三

六二・二〇九　人間発展の原理㈠　三

六二・二一一　家族の研究とその関係について　三

六二・二四三　経済的な家庭の資源と管理　三

六二・二七二　生活の環境学　三

六二・三七五　家庭住居（家族との生活の場）における消費者としての選択　三

六二・四三一　家族の研究における研究（調査）の方法　三

選択科目（註二参照）五七

選択科目に関する註

一　五・二二〇のかわりに五・二二一を取得することができる。

二　選択科目は、次の最低単位数を含むものとする。

a　家庭の研究のうちから二七時間、これは次の三分野のなかから二つ選択するが、二七時間のうち一分野については一八をこえないこと。

i　人間の発展、コース、二一〇、三一九、三二〇、三二一、四一二、四一三、四二二、四二三、四二六、四二七、四二八および四二九。

ii　資源の管理、三五四、三四六、四二九、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五および四四六。

iii　生活の環境学　二七一、三七三、三七四、四二九および四七三。

b　学科外と学部内から六単位。

c　学部外から九単位。

大体少なくとも六単位は、芸術部社会科学系から選択するものとする。

被服および繊維学科（六四）

学科長　シエイラ・A・ブラウン

この学科を選択する学生は、デザイン、生産行為（生産の経済行

第一年次　　**単位数**

二・一二三　一般化学　六
一七・一二〇　基礎心理学　（六）
または
七七・一二〇　基礎社会学　（六）
二八・一〇一　近い環境での人間の要求　三
三〇・一一七　基礎栄養学　三
三〇・一一九　基礎食品学　三
六二・一七〇　デザインの基礎　三
七一・一二五　生物学B　六

第二・三・四年次

第二年次に入る前に、学生は履修科目全体にわたって、カウンセラーのアドバイスを受けること。

五・二〇〇　統計分析一　三
一八・一二〇　理論経済学　六
二八・二〇四　コミュニケーション（情報）の理論とその技術　三
二八・二〇五　研究（調査）の方法　三
二八・三〇九　人間環境学の問題点　三
三〇・二一一　食品学研究および管理　（三）
または
三〇・三二四　高度な食品の研究　（三）
三〇・二一二　食品および栄養の原理　三
三〇・三〇四　家庭栄養学　三
三〇・四一六　食品ならびに栄養にかかわるゼミナール　三
六〇・二二〇　一般微生物学　（3～6）
または
七八・四一五　食品微生物学

選択科目（註二・三を参照）五四～五七

選択科目註

一　学生は五・二二〇のかわりに五・二二一を取得すること。

二　五四～五七単位のうち、少なくとも一八単位は、食品、栄養学から選択し、このうち九単位は、学科外で学部内から選択しなければならない。

三　栄養学および食事制限に重点を置く者は、二・二三五の中級生物学および二二・二二五人間の身体構造と生理学を選択すること。

家庭の研究（調査）学科（六二）

学科長（：）　ビア・カーター

この学科は、人間の発展、資源の管理または家庭と住居（家族との生活の場）の一つまたは、それ以上に重点をおくものでコースを選択することができる。

コース番号　　**単位数**

第一年次

一七・一二〇　基礎心理学　（六）

高等学校で化学三〇〇を履修し、二・一二三の一般化学の準備とする。

教育学部を希望する者は、この学科を選択しなければならない。一年次修了後これらの学生は教育学部へ登録する。くわしい履修方法については教育学部P二一三の一般的な時間割を参照すること。

コース番号		単位数
第一年次		
二・一二三	一般化学	六
一七・一二〇	基礎心理学または	
七七・一二〇	基礎社会学	六
二八・一〇一	近い環境における人間の欲求（要求）	三
三〇・一一七	基礎栄養学	三
三〇・一一九	基礎食品学	三
六二・一〇一	家族と人間の発展	三
六二・一四二	家族の管理原理	三
六四・一〇一	基礎デザイン学	三
第二・三・四年次		
二年次に入る前に、履修単位全体をカウンセラーと相談すること。		
一八・一二〇	経済理論	六
二八・二〇四	コミュニケーション（情報）の理論とその技術	三
二八・二〇五	研究方法の基礎	三
二八・三〇九	人間環境学の問題点	三
三〇・二一一	食品の研究と管理	三
三〇・三〇四	家庭栄養学	三
六二・一七〇	デザインの基礎	三
六二・二四三	経済的な家庭の資源管理	三
六二・二七二	生活環境学	三
六四・一〇二	現代繊維学	三
六四・二一五	建築デザイン	三
七一・一二五	次の一つを選択生物学B	六
	人文科学	六
選択科目（註一参照）		四二

選択科目の註

一　四二単位のうち少なくとも二四単位は学部内のコースから選択すること。

食品と栄養学科（三〇）

学科長　NA・マイケル・エスキン

食品、栄養学を選択する学生は、栄養食品に重点をおく科目、食事制限、または食品サービス、管理のいずれかを選択することができる。

この学科を選択する学生は、二・一二三の一般化学にさきがけて、高校での化学三〇〇を履修していなければならない。

コース番号

学務委員会は、学生からの規約に対する要求を考慮し、単位の選択および卒業の資格を検討するものとする。

特待生

フルタイムの学生で三七単位以上を登録し、三・五平均点以上を取得した者は（平均して九三点以上）特待生と做す。

出席および試験

出席および試験に関する規定については、学部長から直接受取るものとする。

学習時間配分

一九八一年およびそれ以後入学する学生は、次の四学科目のうちから一学科目を選択するものとする。

総合・食品栄養・家庭（家族）・または被服

学士号（学位）を希望する者は――訳者註・（学位）とあるは修士・博士課程への進学を意味する――選択学科目で必要とする一二〇時間単位を修了すること。各学科の選択科目は、学科間の転科を認める。しかし時間がたつにつれてこのチャンスは少なくなる。別の学科へ転科する学生はその学科の評価基準に合致しなければならない。

ガイダンス

学部では入学生に対してガイダンスを行ない、各学生にコース選択のカウンセラーをつける。カウンセラーは、学生の専攻分野に属する教員とし、各学生はそのカウンセラーとの相談に基づいて履修学科目を決定する。次の学年の履修学科目は第二学期終了前に選出し、履修科目の変更はカウンセラーの文書による許可を必要とする。

学部履修規定

……各学科とも次の学科目を履修すること。学部外からの単位三〇時間を取得し、そのうち科学六時間・社会学六時間を含むものとする。

……学部の核単位を一五時間とする。

……学部内では四五時間を単位とし、そのうち九時間は専攻学科以外から取得すること。

……最低を一二選択時間単位とする。

学部の核コース

コース番号		単位時間
二八・一〇一	近い環境での人間の要求	三
六二・一七〇	デザインの基礎	三
二八・二〇四	コミュニケーションの原理と技術	三
二八・二〇五	研究（調査）への導入	三
二八・三〇九	人間環境学の問題点	三

学科案内

学科長　ドロシーM・ボルトン

総合学科

これは学部全般にわたる分野を履修し、それに関連する職種を選ぶ学生のために設けられている。この学科を選択しようとする者は、

本のA「九〇点」、B「八〇点」、C「七〇点」、D「六〇点」という優・良・可評価の順位を念頭にして）合格点はDおよびそれ以上とする（おおむね六三点以下は不合格）

2 最高一五〇時間（二五コースおよびそれと同等）が一二〇時間で単位修了と認められる。

3 学生の単位および学力評価は、ある段階で、それぞれの登録コースの数で判定される。登録コースとは、合格点をとったコース全てが不合格となった者で、再履修できなかった者、および学生の記録により、ほかの科目の履修ができなかった者を含む（訳者註・日本でいう合格、追再試の意）。

4 学生の身分は、二四時間単位修了後の春季、および学生の登録がおこなわれる五月以降とする。（訳者註・日本の四～五月および九～一〇月の意）。

5 学習過程で学生は、一定の水準かそれ以上を保たなければならない。この水準に達しなかった者には進級準備期間とされる。この期間に入った者は、次の登録までに一定のレベルに達しなければならず、達しなかった場合には原級にとどまる。二ヵ年続けて仮級第することはできない。（一年を二回繰返えしたら翌年は退学になる）

仮級第（仮進級）の水準

単位の履修時間	**昇進（GPA）**
六～三〇時間（一～五コース）	一・八〇
三三～六〇〃（五½～一〇〃）	一・八五
六三～九〇〃（一〇½～一五〃）	一・九〇
九三～一二〇〃（一五½～二〇〃）	一・九五
一二〇時間以上（二〇コース以上）	二・〇〇

パートタイムによる学生の規約

1 学士号取得のための最高年限は一〇年とする。

2 二四時間単位修了後の評価で、毎年五月にD段階で一定の水準に達していること。

一般規約

コースの再履修

点数向上の為にどのコースも再履修が認められている。期末試験に合格しなかった者には、再試験は行なわれない。

学生の転部

入学時に、単位の評価を行ない、同一コースと認められた場合には単位の滑り込み（スライド）が認められる。（例えば、日文から英文へ転学科する場合英語(1)～(5)は、そのまま認められ(6)だけを履修する）必修・選択のいずれもが認められれば、追加単位がスライドされる。（もし、英文から日文へゆく場合に、言語学は追加として認められる）

単位の移動

この大学での単位を別の教育機関で学ぶ場合は、その機関に登録する以前に学務課から文書での許可を得ること。それ以外の単位は認められない。Cおよびそれと同等の点数は移動を認めない。

学術規約に対する訴因

できるものでしょう」という。これらはいずれも『自然と文化』・日本ナショナル・トラスト刊で紹介された日本人以上に日本人的な滞日一〇数年のガイジンさんたちのことを思出したもので、また閑山窯とか瑞光窯とか呼ばれている作家のもとへ、修行のために来日していたドイツ人のクリスティーネ・ワグナーさんは「生国の文化を温存させながら、学び修得した日本の文化的技術をしっかりと密着（合体）させたい」という。また、先のアメリカ人のスチーブン・ベルファールドさんも同じ心境で、茶道に精進している。

彼らの日本文化理解は独断的なところがあるが、それなしには文化の伝達などはほとんど望み得ない。だからこういう人達を大事にしなければならない。「昔の人は自分たちの頭で判断し一番いいと思う方法を決めた。これが文化であり伝統であると思います」……ロジャン・ピエール（露地菴磐）さんの言葉が脳裏に焼付いていて離れないのである。

ヒューマン・エコロデー学部

学部長　ブルースE・マグドナルド

ヒューマン・エコロヂー（わが国では人間環境学とか家政学と言っている）は、人間社会の発展と構造にかかわる分野を研究するものであって、個々人が環境との相関関係を創造する（造り出す）その方法を取扱うものである。主眼点は、人々の欲望とその要求を充たす為に使われる。物質・資源の分野の研究を通して教養を身につける。また、人間発展の為の理解に貢献するような、基本的な技術と科学を学ぶのである。

カリキュラムの教育的なゴールは、学生が使用し、解釈に用い、応用できる情報や技術の基礎を与え、社会に役立て、各種の職業に（就職に）学生が準備することができるものとする。

教育単位（講座）としての学部の伝統は、人間の要求（欲望）に関するものと、一九一〇年からの資源にかかわるものである。最近このヒューマン・エコロヂー学部は、被服関係学、家族関係学、食品学、栄養学を含み、学部での学習は、ビジネス・産業・食事規制（栄養士に類するもの）・各種医療関係（医療保健に類するもの）・政府（州政府を含む）・研究機関に就職できる機会を与えるように配慮されている。

学士号

学士号は、四年間の学習が必要である。必要単位を修了した学生には、バチェラー・オブ・ヒューマン・エコロヂーの称号が与えられる。このほかの学生には、被服・家庭・食品栄養のいずれかの学士号が与えられる。

ヒューマン・エコロヂーと教育学の統合の場合に（関係で）は、ヒューマン・エコロヂーおよび教育学両方の学士号を取得することができる。（訳者註・夏季大学での取得単位とか他大学との交換単位の取得）

学術的規約

1　卒業に必要な単位　一二〇時間、最低二四〇点をとること、これは、平均二〇点、つまりC平均、（訳者註・カナダの大学は日

が、そうした経験は、日本はあまり持っていないことを自覚すべきである。またもう一つ、日本には中国から伝わった儒教思想で倫理観がつくられていることである。この儒教思想は夫婦、君臣など、ある決まった関係の倫理についてのものであり、〝外〟に対する倫理には乏しい。その点、ある意味で儒教は日本を国際交流時代へスムーズに流入できる準備をあまりしなかったといえる。

日本はこうした独自性を自覚すべきだが、他方、逆説的にいえば、自分のユニークさをあまり強調してはいけない。日本人も他国の人と同じ人間だということを十分に自覚すべきである。よく「四季は日本だけにある」と言い切られたり、書物でも見受けられるが、こうした〝日本だけにある〟という論理は無知の発言であり危ない考えである。それは国際交流を最も妨たげるものである。

日本を強調しすぎると、〝日本対外国〟という考え方になる。しかし、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアはあっても〝外国〟はない。つまり日本は多くの国の一つであり、互いに共通の人間性を持つものであるという自覚が大切なのである。これが国際交流の根本的な条件の一つである。

日本は、それを自覚した上で、自分たちの独自性を認めることが必要で、その上で〝平和憲法〟・〝独特の美観〟・〝ビジネスでのグループ生活の秘決〟などといった独自性を分かち合うことによって世界に貢献できよう。

また日本は他の国から学ぶことも必要である。しかし国際交流、国際化というと、日本人はすぐ西洋を考えるが、アジアに目を向けることが大切である。それは、自からアジアのことを大切にすべきだということである。日本にアジアを無視する態度がみられがちなのも、経済的に同じ程度に発達した隣国がないことにも依ろう。しかしアジア諸国の古い文化を再評価する時となったいま、文化的にもゆとりのできた日本人は経済的な観点ばかりでなく、アジアの隣国の文化を見直して交流しなければならない時期にきていると説いていた。

日本の技術と製品が優れていることはいまや世界に知れ渡っている。技術や製品の優秀さは消費者が使ってみればわかることで、わかれば自然と海外へ出てゆく。だが文化はどうかと筆者も考えさせられる。

どの国の場合でも文化というものの伝達は難しいもので、電信・電話・ラジオ・テレビ・映画などコミュニケーションの手段が発達した今日でも、文化の伝達は実に難しいと言えよう。そして伝達されなければ理解されないのが文化だと思考される。

栃木県益子町に住みつきロクロを回し続けるフランス人ロジャン・ピエールさんは「ロクロを回すことは仏さまに近ずくことだ」と、また「般若心経と聖書とも、書かれていることは、根本的に同じことであって、根本にあるものは日本でもフランスでも同じです」とも言う。

日本のパンフレットの、山のふもとに神社がある優雅で静かな写真に魅せられてオーストリアからの来日のブルーノ・マルコさんは、里神楽にたどりついた。そして「難しいのが日本文化だと思い込みがちだが、文化というのはごく身近にあってみなが楽しみ、みなが

属し、われわれに多大の協力を頂いた、R・R・F（イギリス系）さんやその奥さまR（イギリス系）さん（弁護士）、そしてT・T（日系）さんの言葉を要約すると、カナダの公立大学は地元中心で、留学生はアジアが大多数を占めている。この地元学生は、目的を持って入学し、指導要項に従うので、卒業と同時に就職も決定するのが常道とされていると。また、所謂、有名大学と言われ、自他共にそれを認めているのは、一、ブリティシュ・コロンビア大学（晩香波（バンクーバー））。二、トロント大学。三、モントリオール大学。四、マニトバ大学とか。そしてカナダでは、どの大学を卒業したかではなく、何の学科を学んだかが問題となるのであって、入学に当っても、高校で一定の成績を取得しなければ進学（大学への入学）は認められないということであった。

さきのR・R・Fさんを煩らわして、大学の図書館を調査していたとき、同氏がどこからか持って来て下さった、夏季大学の国際関係学科での、講義要旨を、ここで紹介し、序文に代えさせて頂くことにする。これは敢て言うならば、国際関係学での〝地域研究〟と言われるものであろう。

宗教文化研究所・V・ブラフト

国際交流について

歴史的な観点からみて人間社会の単位はますます大きくなった傾向がみられる。かつては①家族が単位となって部族ができたが、割に小さい単位のものだった。次いでは②都市国家、あるいは日本ならば藩のような単位となり、いまは③国家の単位となって技術的、経済的な発展にふさわしくない単位となってしまった。そのため現今になって国際交流・国際化がやかましく言われることになった。

この国際的交流は、個人的交流と違うか、同じかという問いが出されるが、根本的には同じではないかと思われる。すなわち、人間は赤児のとき全く自己中心的なものとして生まれる。そして教育はそういう自己中心的なものに次第に打ち克つ課程で、自己以外の多様性を認め、他人が自分と違う権限を持っていることを認める。赤児がそうした社会化―交際について鍛えられるのは、はじめは兄弟間で、次いで学校における同僚との交際で〝自己中心でなく、自分は多くの人達の一人である〟という自覚が養われる。しかし社会的レベル――グループ間では、一つのグループにおいては同一性、統一性が必要とされるが、他のグループに対する統一性はないから、ともすれば、個人はグループの中に安んずる同一性を見付けて、そのグループに執着し、他のグループを攻撃しがちにもなる。これは一般論的な論旨であるが、こうしたことから社会的、国際的交流を複雑にする一つの要素がひそんでもいる。

さて国際時代における日本についてふれておくと、まず日本人はユニークなことを自覚すべきである。第一に、日本ほど一人で歴史を歩いて来た国はないことである。それは島国という地理的な位置から由来するものであり、長い鎖国時代（三〇〇年間）もあってある程度自分で左右を決定して済ますことができた。ほとんどの国は身近に隣国を持ち、互いに争ったり、仲直りして過ごしてきている

ていくこと、人間の多様性を容認していくことなどを学ぶということが目的であるが、しかし、時間割の編成は大変で、前の学年末に履習登録を行なわせて、コンピュータによって編成するところもあるほどである。

ⓒ 進学制度　カナダには日本のような高校入試はない。大学進学はどうなっているかというと、応募資格としては中等教育修了証書が要求される。そして、この基礎資格だけで入学できるところと、学部や学科によってはそれぞれに条件をつけるところなどがあって、大学進学制度も多様である。たとえば、中等教育段階で履習する科目を指定するところや、特定の科目の成績が一定の水準以上であることを要求するところとか、また一定の職業経歴を要求するところなどや、大学側で面接やテストを行なうところなど実に多種多様である。全体としては、中等教育修了証書のみを要求するところが多い。なお、社会人に対して別の選考基準を設けている場合が多く見られる。

おわりに見聞記をもう少し追加するように、カナダの教育制度を支えている精神風土の特徴は独自性の追求であるといえよう。これに比べると日本はむしろ類同化指向の社会と思考される。カナダを旅して気がつくことは他人の目を余り気にしないで大らかに生きる雰囲気が漂よっていることである。個人差に応じた教育も他と異ることを意に介さぬ雰囲気がなければ育たないことであろう。移民や難民をこころよく受け入れ、かれらが自分なりに生きて行かれるような制度づくりに努めていることが肌で感ぜられるのである。

本稿は清泉女子大学の小林順子教授の〝外国教育事情〟から借用したものであることを明記しことわりと謝意を表したい。

なお、マニトバ大学のヒューマン・エコロデー学部の、学生指導要項の紹介に入る前に、「単位の移動」規則、わが国で言う「単位交換」規定について、アメリカ人で、いま在日しているB・スチーブンさんが語ったことを附記し、参考にして頂ければ幸甚と思考します。

彼が語るには、われわれアメリカ人は、開拓時代からの者で三世か、四世（一七七六年以降）、イギリスの殖民地時代からでも四世か、五世であって、連邦政府・移民局の一六セクションのいずれかに該当し、所属している。自分の父系は、イギリスで代々神父であり、母系は、フランスで代々法律家系であって、お祖母さんが九一才で現存している。従って、お父さんは教会の牧師さんであるとのこと。

そして、彼はミシシッピー州生れで、フロリダ州のエカード・カレッヂ Eckerd College に学んだが、先のような家庭事情からと同大学の単位交換規則を考慮し、イギリスでは、ロンドンの北方郊外に当る、コーベントリー市のカテードラル・スタデイー・センターに。そしてコロンビヤ（南米）のボゴタ市のエカード・カレッヂ・スタデイー・センターのそれぞれで、夏季大学単位を取得し、小学校教育学科と幼児教育学科の卒業資格を取得することができたので、両方の学士号が許されたと言うのである。

また、マニトバ大学構内教会の神父さんで、宗教文化研究所に所

数派の擁護のみが条文化されていたが、これは現在でも有効である。従がってこれに言語上の少数派の教育用語の保障が加えられたということである。

カナダは移民の多い国である。だから、英・仏語以外の母国語を持った移住者の子供達のために、その州の教育用語を教授する特設学級が設けられ、かれらはそこに約一ヵ年在学し、言語を習得してから正規の学校の適当な学年に編入されるようになっている。また、これら移住者が母国語の教育を継続する機会も与えられている。たとえば、ケベック州では土曜日に母国語の授業を開設し、その場所代と教材の一部を補助している。

二　個人差を重視する学校教育

ⓐ　初等教育　小学校を訪問して目につくことは、個別指導を多く取り入れていることである。ケベック州の州立教育研究所では個別学習用のワークブックの開発を研究テーマの重要な柱の一つとしている。実際にそのワークブックを手にして見ると、非常にきめの細かいステップの組み方がなされており、無理なく次の段階に進めるようになっている。また、一単元ずつ小冊子になっていて、小テストで終るが、フィードバックは教師が行うことになっている。児童が一人一人教師にワークブックを見せて、指導を受けるという授業形態は比較的多いということで、三年生までは国語・算数などの道具的教科に力がそそがれ、一年生で遅れの目立つ児童には特別指導が行なわれる。また幼児級（幼稚園として独立しないで小学校に組み入れられている）では、週二回矯正教育の専門家—orthopéo-laqoque—が巡回し何らかの障害を持った子供を発見し、適切な処置がとれるようになっている。人間形成に重要な役割を担っている道徳教育にしても、親の希望によっては宗教教育を選らぶか無宗教の道徳教育を選択することができるが、宗教教育を選択する者の方が多いそうである。ケベック市の効外にある某小学校では、キリスト教の宗教教育を選択する者が約九〇％ということであった。

ⓑ　中等教育　教科別進級制度と総合制中等学校というのがカナダの中等教育であってこの国で多く取り入れられている制度である。個人差を学力の差と適性の差としてとらえ、学力の差は教科別進級制度によって、適性の差は選択の幅が広い総合制によって解決しようとしている。教科別進級制度というのは、合格点に満たない科目はもう一度その学年の科目を履修し直す制度である。たとえば、一年生の数学がある程度理解できなければ二年生の数学には進めないのであって、分らないままどんどん進級し、ますます分らなくなるのを防ごうというのである。それではいつまでたっても卒業できないのではないかという疑問が起るが、実際にはそれほど問題にならないようである。中等教育修了証で取得条件には、必修科目は最少限度におさえられ、最終学年の科目が含まれていない州もある。また義務教育が年齢制で、無理に最終学年まで在学しなければならないということはない。この教科別進級制と総合制による幅広い選択制度により、同一学年の生徒の時間表がさまざまである。このようにすることは、学校生活においても自分は自分なりに堂々と生き

カナダにおける教育の現状見聞記

——マニトバ Manitoba 州立大学ヒューマン・エコロジー Human Ecology 学部を紹介——

長谷川知一

はじめに

多様性を受容するカナダの教育制度

一　多文化主義と州自治制度

広大な領土をようし、先住民族とそれよりはるかに多い移住者によって構成されているカナダは、多文化主義をモットーとした地方自治制度が発達した国である。教育については一八六七年憲法によって完全に州政府に委ねられたために、各州の教育者が中心となって、それぞれの教育政策の下に独自の教育制度を発展させている。イギリス的なオンタリオ Ontario 州、フランス系住民の多いケベック Québec 州、アメリカに親近感を抱くブリティッシュ・コロンビア British Columbia 州などと多様である。しかし、フランスやイギリスやアメリカなどの制度をそのまま持ち込んでいるわけではない。州相互に影響を与えながら、〝自分達の〟制度を創りあげてきたのであった。

学校制度についていうならば、オンタリオ州は八・四（または五・四（または三）制で——Y・M生は卒業後日本の医学部へ留学を希望と話した——、ケベック州は六・五・二（または三で高等教育の一般教育課程と職業教育）あるいは三（専門課程のみの大学）制であり、ブリティッシュ・コロンビア州は七・五・四制である。もちろん、学習指導要領や教科書なども州教育者の指導下にある。また、他の州に転校する生徒のためのガイドブックがあるほどである。

教育用語も州によって異なることがある。一九六九年、トルドー首相はカナダの公用語を英語と仏語とした。このことによって英語のみを公用語とする州に対してケベック州のように仏語のみを公用語とする州が出現し、そのため、英仏どちらかがある州の少数派となった場合、その少数派の言語による教育が保障されるべきであるとして、この四月に制定された一九八二年憲法はこの少数派の教育用語に関する規定を施行した。前の一八六七年憲法では宗派上の少